修士論文概要

子育て時期の夫婦における育児感情と幸福感についての研究
－夫婦間のペアレンティング調整に着目して－

奥田　美加

1. 問題と目的

1970 年代の子育ては、3 歳ごろまでは母親が子育てに専念することが望ましいとする「三歳児神話」が浸透していたが、時代の変化により、子育てを取り巻く環境が変化し、子育ては夫婦協働でするものとされてきている。しかし、昨今の「未婚化」「晩婚化」「晩産化」による少子化が進み、育児・家事問題、児童虐待相談の対応件数の増加など、夫婦を取り巻く環境において困難が多くなっていると考えられる。また共働き夫婦も増え、ワーク・ライフ・バランスなど、過去と現在の性役割も変化している。

一方で、加藤ら(2012)は、夫婦の相互作用影響関係の中に、子育てに対する父親の関与行動を抑制し、夫婦がともに親になっていくことを阻害すると思われる母親の抑制行動についてはあまり考えてこられなかったとしている。夫婦を取り巻く環境が変わる中、父親の子育て関与が増え、そのことにより、母親の抑制行動も出てくるのではないかと考えられる。子育ての過程で、父母がどのように“夫婦としてともに”子育てをしているのかを「夫婦ペアレンティング(養育)」という。加藤ら(2012)は、子育て動機の高い母親が、子育て動機の高い父親に対して、父親の子どもへの接近をコントロールしようとすると、母親は葛藤を抱きやすいとしている。積極的に子育てに関わろうとする父親を促進する母親の行動と、逆にそれを抑制する母親の行動が出てくるのである。子育てに対する、促進行動と抑制行動の各側面、あるいは両者の組み合わせやバランスが父親関与に与える作用の双方を検討するためには、母親による父親関与の“調整”ということが必要になってくるのである。

夫婦は育児の喜びや楽しみ、不安や葛藤など様々な感情を抱きながら、肯定的な感情と否定的な感情を感じながら子育てをしている。育児に対する親の否定的な感情に対する支援と共に、育児によってもたらされる自分自身の幸福感を高めるような支援を検討していくことも重要な課題である。

本研究では、幼児期の子どもを育てる夫婦が抱いている、肯定的な育児感情と否定的な育児感情への影響について検討する。また、子育ては夫婦間において、促進行動や抑制行動をしながら、どのように協働し、調整しながら育児をしているのかを夫婦ペアレンティングという視点に着目して研究する。幼児期の子どもを育てる夫婦において、家事・育児行動の影響や、夫婦ペアレンティングによる、育児感情と幸福感への相関、また夫婦の相違についても検討することを目的とする。

2. 方法

対象者：A 県の幼稚園 1 施設、保育園 1 施設の就学前の子どもを通わせている夫婦 141 組

質問紙の構成：

1)フェイスシート　年齢、職業、子どもの数、子どもの年齢、子どもの性別、同居家族の有無

2)家事育児行動尺度(日隈ら,1999)「相手行動」「世話行動」「精神援助行動」「家事行動」

3)育児感情尺度(熊野,2017)「育児肯定感」「育児不安」

4)夫婦ペアレンティング調整尺度(加藤ら,2014)「促進行動」「抑制行動」(夫婦ペアレンティング尺度は、子どもとのかかわりの中で母親の行動についての質問からなっており、母親は自分の行動、父親は母親が自分に対し

てどれだけ行っているかを質問する項目となっている。)

5)人生に対する満足尺度(Diener,1984)日本語訳(角野,1994) 主観的幸福感に基づき、その認知側面を測定する。

調査時期：2019 年 10 月から 11 月

手続き：事前に施設の責任者に本研究を説明し同意を得た後、保護者に調査内容と倫理事項について説明し、同意が得られた保護者を対象に分析した。

3. 結果

家事・育児行動尺度とペアレンティング調整尺度の下位尺度に加えて、子どもの数を説明変数とし、育児感情と幸福感を目的変数とし、重回帰分析(強制投入法)を行った。今回多くの父親と母親の両方から回答が得られたため、父親と母親の差異に基づく分析も行った。

父親は子どもに対する「相手行動」、夫婦間の「精神援助行動」が高いと「育児肯定感」が高まることが示された。父親は母親からの「抑制行動」が高いと認識していると、「育児不安」が高まることが示された。父親は母親からの「促進行動」が高く、「抑制行動」が低いと思っている人は「幸福感」が高まることが示された。一方で、母親は「子どもの数」にかかわらず、子どもに対しての「相手行動」が高く、父親への「促進行動」が高いと、「育児肯定感」が高まることが示された。母親は父親への「抑制行動」が高いと、「育児不安」が高まることが示された。母親は夫婦間で話し合いがあり、母親が父親の子どもへの関わりが信頼できると、「幸福感」が高まることが示された。

夫婦の差異に関しては、子どもに対する「相手行動」の差が小さいと、父親の「育児肯定感」が高まることが示された。また、夫婦間の「精神援助行動」の差が大きいと、父親と母親の「育児不安」が高まることが示された。「抑制行動」の差が小さく、「促進行動」の差が大きいと、父親の「幸福感」が高まることが示された。

4. 考察

本研究の結果から、父親は、子育てに関して、子どもの相手や世話をしたり、夫婦間の話し合いがあり、母親から自分の子育てに関して否定ではなく信頼してもらうことで、夫婦の関係はうまくいき、また子育てについては素晴らしいと感じることが出来、自分の人生の幸福感も高まるのではないかと考えられる。母親は、父親が子どもへの実際の関わりである育児や母親のサポートである家事に参加してもらうことにより、父親の子どもや母親へ対しての信頼が高まり、夫婦の関係もうまくいき、子育てを素晴らしいと感じることが出来、自分の人生の幸福感も高まるのではないかと考えられる。

今回の研究では、夫婦一組一組の調整の仕方までは調査することはできなかった。子育ては夫婦が出来る限り協力し、協働で行うことが理想である。時代の変化と共に、父親の育児・家事参加が増加傾向にあるが、父親のサポートの仕方が母親の期待に沿っているかは、夫婦の日ごろのコミュニケーションが影響してくると推測される。夫婦ごとの子育ての調整の方法を質的調査などでみていくことが、これからの夫婦の子育てにおける興味深い研究になるのではないかと考えられる。子育て時期の夫婦に寄り添い、その状況に応じて父親、母親の必要なサポートを提案できるような、心理的、精神的なサポートを考えることが心理士の役割であると考えられる。

5. 引用文献

加藤ら(2012).東北大学大学院教育学研究科研究年報.61,1,109-126

加藤ら(2014).心理学研究.84,6,566-575